

「神の国はいつ来るのか」

ルカの福音書 17:20～37

はじめに

前回は十人のツアラアトに冒された者たちがイエシュアによってきよめられたという出来事でした。「行って自分を祭司に見せなさい」というイエシュアのことばに従った十人はその行く途中できよめられました。きよめられた九人のユダヤ人たちは最後までイエシュアのことばに従いましたが、そのうちの一人のサマリア人はイエシュアのみもとに帰って来てひれ伏しました。「この他国人のほかには神をあがめるために戻って来た者はいなかった」と言われたこの出来事の中に、終わりの日に起こる神の印を押される144,000人のイスラエルの残りの者と、その彼らの宣教によって御国の福音を聞き、イエシュアを信じて天の御座の前に上げられるという黙示録 7:9 に記された諸国の民「誰も数えきれないほどの大勢の群衆」の「型」が表されていることを述べました。今日の箇所はまた前回とは全く異なる状況、出来事ですが、そこに秘められている神の国の奥義は、やはり世の終わり起こる神のご計画であり、イスラエルの残りの者が、世の終わりにおける彼らのその働き、目的が神の国の奥義として表されていることを解き明かしてまいります。どうか「これから起こることを教える聖霊」が私たちを「主人のすることを知らないしもべ」のようではなく、「神の友」としてくださいますように。

1. あなたがたのただ中

ルカの福音書【新改訳 2017】

17:20 パリサイ人たちが、神の国はいつ来るのかと尋ねたとき、イエスは彼らに答えられた。「神の国は、目に見える形で来るものではありません。」

17:21 『見よ、ここだ』とか、『あそこだ』とか言えるようなものではありません。見なさい。神の国はあなたがたのただ中にあるのです。」

「神の国はいつ来るのか」というこの大きな問いは、おそらく神を信じる者の多くが抱いている問いかけでしょう。しかし今日、この箇所にあるイエシュアのその答えとみられる御言葉から、多くのクリスチャンが、神の国のその到来について誤解しています。それは「神の国は、目に見える形で来るものではありません」という御言葉から、神の国は目に見える、形のあるものではない、という大きな誤解をすることです。もう一度上記の箇所をよく読んでください。ここでイエシュアに問うているのは誰ですか、弟子たちではありません。パリサイ人すなわちイエシュアを信じない、イエシュアに敵対するユダヤ人たちののです。ですから彼らのこの問いに対するイエシュアの答えもまた彼らパリサイ人に対するものであり、すなわちイエシュアをメシアとして認めないユダヤ人および神に逆らう者に限定した答えであることを覚えていただきたいのです。その上でこの御言葉を解釈するならば「神の国は、目に見える形で来るものではありません」というイエシュアのこの答えは、このパリサイ人たちのように、たとえ律法を重んじるユダヤ人、イスラエルの民であっても、イエシュアを信じない、メシアとして認めない者はみな決して神の国を見ることはできない、という意味として語られていることがわかるのです。

さらに彼らパリサイ人に対してイエシュアはこうも言われました。「神の国はあなたがたのただ中にあるのです」と。この御言葉も様々な解釈による議論がなされているところです。しかしこれもパリサイ人すなわちヘブル語で聖書を読むユダヤ人に対するものであるならば、ヘブル語で解釈されなければならないのです。ここに使われている「ただ中」と訳されているヘブル語はケレヴ(קֵרֶב)といい、これが聖書で最初に使われた箇所とその本来の意味を見出すことができます。

創世記【新改訳 2017】

18:10 すると、そのうちの一人が言った。「わたしは来年の今ごろ、必ずあなたのところに戻って来ます。そのとき、あなたの妻サラには男の子が生まれています。」サラは、その人のうしろの、天幕の入り口で聞いていた。

18:11 アブラハムとサラは年を重ねて老人になっていて、サラには女の月のものがもう止まっていた。

18:12 サラは心の中で笑って、こう言った。「年老いてしまったこの私に、何の楽しみがあるでしょう。それに主人も年寄りです。」

アブラハムの妻「サラは心の中で笑って」という、ここに聖書で最初のケレヴがあり、それはサラに「男の子が生まれています」という事実、出来事を聞いたことによるものです。つまりこの「ただ中」ケレヴとは本来「男の子が生まれる」という出来事を指す言葉なのです。これは表面的にはアブラハムの子イサクの誕生を指し、アブラハムの子孫、イスラエルの子孫繁栄を指し示すものと解釈できます。しかし、ここでイエシュアは神の国はどのようなものか、ではなく「神の国はいつ来るのか」どのようにして来るのか、という問いに対する答えとして語っておられますので、この「男の子が生まれています」という出来事は「神の国」が来る前ぶれ、つまりイエシュアの地上再臨の前に起こる、以下の預言を指し示していると考えられます。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

12:1 また、大きなしるしが天に現れた。一人の女が太陽をまとい、月を足の下にし、頭に十二の星の冠をかぶっていた。

12:2 女は身ごもっていて、子を産む痛みと苦しみのために、叫び声をあげていた。

12:5 女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖をもってすべての国々の民を牧することになっていた。その子は神のみもとに、その御座に引き上げられた。

この預言の「女は男の子を産んだ」とは、世の終わりの大患難の中で、額に神の印を押されたイスラエルの残りの者がすべての国々に福音を宣べ伝え、大勢の群衆がこれ信じて子羊の御座の前に引き上げられること(黙 7:9)を指し示しており、このような預言の成就、出来事を経て、ついにイエシュアは地上再臨し、神の国は来る、ということがイエシュアの言われたケレヴ「ただ中」という言葉には奥義として秘められているのです。十二部族からなる全イスラエルがイエシュアをメシアと信じ、そして異邦人に福音を宣べ伝え、大勢の者がそれを信じるようになるという神の奇蹟、そのご計画は、まさにサラが「心の中で笑って」とあったように、選民思想の強いユダヤ人の常識からしてあり得ない、冗談としか思えない、そんな馬鹿げたことが起こるものかと嘲笑ってしまうようなものです。しかし終わりの日、そのようなこと

が起こるということを示して「見なさい。神の国はあなたがたのただ中」すなわちパリサイ人にとって冗談のような、馬鹿げた、嘲笑うような出来事が起こり、それを経て、神の国は来るとイエシュアは言われたのです。

2. 人の子の日

ルカの福音書【新改訳 2017】

17:22 イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたが、人の子の日を一日でも見たいと願っても、見られない日が来ます。

17:23 人々は『見よ、あそこだ』とか、『見よ、ここだ』とか言いますが、行ってはいけません。追いかけてもいけません。

17:24 人の子の日、人の子は、稲妻がひらめいて天の端から天の端まで光ると、ちょうど同じようになります。

パリサイ人に象徴された、イエシュアを信じない者が神の国を見ることができない、という事実に紐づけて、次にイエシュアはご自分の弟子たちにもまた見ることができないものがあることを教え始められます。弟子たちが見ることができないもの、それは「人の子の日」であるとイエシュアは言われました。そしてそれは「ノアの日…洪水が来て、すべての人を滅ぼして」しまう日、また「ロトの日…火と硫黄が天から降って来て、すべての人を滅ぼして」しまう日のようであり、すなわち終わりの日の未曾有の大患難を指し示しています。これを弟子たちが見ることができない、見ることはない、つまり決して滅びることはないとイエシュアは言われたのです。しかもこれを「一日でも見たいと願っても、見られない」とありますから、この箇所における弟子たちの中には、大患難が来る前に天に引き上げられ、集められる、携挙される私たち教会の存在が「型」として表されていることがわかります。これをここでは「人の子は、稲妻がひらめいて天の端から天の端まで光る」と表現していますが、マタイの福音書にも同様のものがあり、より詳しくこれを記しています。

マタイの福音書【新改訳 2017】

24:27 人の子の到来は、稲妻が東から出て西にひらめくのと同じようにして実現するのです。

24:30 そのとき、人の子のしるしが天に現れます。そのとき、地のすべての部族は胸をたたいて悲しみ、人の子が天の雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。

24:31 人の子は大きなラッパの響きとともに御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで四方から、人の子が選んだ者たちを集めます。

24:33 …これらのことをすべて見たら、あなたがたは人の子が戸口まで近づいていることを知りなさい。

このように、イエシュアは「大きなラッパの響き」「御使いたち」とともに、地上ではなく「天の果てから果てまで四方から、人の子が選んだ者たちを集めます」とあり、またこの出来事は「人の子が戸口まで近づいていること」のしるし、前ぶれであり、つまりイエシュアが地上再臨される時がもう間近であること

を知らせるもの、すなわちその前に起こるイエシュアの空中再臨（Iテサロニケ 4:16~17）を指していることがわかります。

3. 人の子の苦しみ

ルカの福音書【新改訳 2017】

17:25 しかし、まず人の子は多くの苦しみを受け、この時代の人々に捨てられなければなりません。

17:26 ちょうど、ノアの日が起こったのと同じことが、人の子の日にも起こります。

17:27 ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていましたが、洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。

17:28 また、ロトの日が起こったことと同じようになります。人々は食べたり飲んだり、売ったり買ったり、植えたり建てたりしていましたが、

17:29 ロトがソドムから出て行ったその日に、火と硫黄が天から降って来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。

17:30 人の子が現れる日にも、同じことが起こります。

「人の子は多くの苦しみを受け、この時代の人々に捨てられなければなりません」とあり、これはイエシュアの受難を指すものです。そしてそれが「ちょうど、ノアの日が起こったのと同じことが、人の子の日にも起こります」と続き、イエシュアの受難が終わりの日の大患難の苦しみ、正確には反キリストによってユダヤ人たちが大迫害を受けることを指し示したものであったことがここに示されています。もしイエシュアの受難、十字架の目的が人の罪の贖いのためだけであったなら、イエシュアは傷のない子羊のように扱われ、神殿の祭壇で全焼のいけにえとしてささげられたことでしょう。しかし実際には時の支配国ローマの名のもとに不当な裁判と激しい拷問を受け、嘲られ、罵られ、異邦人の極刑である十字架で、しかも都エルサレムの外で殺されたのです。ですからイエシュアの受難とは終わりの日における大患難、イスラエルを襲う大きな苦しみの日を指し示しているのです。イエシュアご自身によってまさにこう預言されているとおりです。

ルカの福音書【新改訳 2017】

23:27 民衆や、イエスのことを嘆き悲しむ女たちが大きな一群をなして、イエスの後について行った。

23:28 イエスは彼女たちの方を振り向いて言われた。「エルサレムの娘たち、わたしのために泣いてはいけません。むしろ自分自身と、自分の子どもたちのために泣きなさい。

23:31 生木にこのようなことが行われるなら、枯れ木には、いったい何が起こるでしょうか。」

このように、イエシュアはご自分を生木に、そしてイスラエルを枯れ木にたとえ、ご自分の受難が後のイスラエル、終わりの日の彼らが受けるより大きな苦しみを指していることがわかります。それはイスラエルだけでなく、まさに地上の「すべての人を滅ぼして」しまうような災いとともになるとイエシュアはここに預言されました。しかしイエシュアがこの受難と死を経てよみがえられたように、この大患難の中にも復活の御業が現れます。それが次のたとえです。

4. 屋上と畑

ルカの福音書【新改訳 2017】

17:31 その日、屋上にいる人は、家に家財があっても、それを持ち出すために下に降りてはいけません。同じように、畑にいる人も戻ってはいけません。

17:32 ロトの妻のことを思い出さない。

17:33 自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。

このたとえもヘブル語のその本来の意味を用いなければ解くことができません。「屋上にいる人」屋上を意味するガーグ(גַּרְגָּ)は本来、幕屋の聖所に置かれた香を焚く金の香壇のその「上面」(出 30:3)を意味する言葉で、まさに香が置かれて主の御前にその煙を立ち上らせる場所を指す言葉です。この金の香壇について黙示録に以下のような預言があります。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

8:3 また、別の御使いが来て、金の香炉を持って祭壇のそばに立った。すると、たくさんの香が彼に与えられた。すべての聖徒たちの祈りに添えて、御座の前にある金の祭壇の上で献げるためであった。

8:4 香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。

この預言は大患難時代の中で御国の福音を聞き、イエシュアを信じ、その後殉教して天に上げられ、御座の前に立つ「だれもかぞえきれないほどの大勢の群衆(黙 7:9)」を指し示すものと解釈できます。つまり「屋上にいる人」とはこの「聖徒たち」を指しており彼らは「降りてはいけません」つまり香の煙のごとく立ち上りなさい、彼らは天に、神の御前に上る者たちですと呼ばれているのです。

そして「畑にいる人も戻ってはいけません」とは、畑にとどまれ、そこに残れと言われている人のことです。ヘブル語でこの畑のことをサーデー(שָׂדֵה)といいます。この初出箇所を見てください。

創世記【新改訳 2017】

2:5 地にはまだ、野の灌木もなく、野の草も生えていなかった。神である主が、地の上に雨を降らせていなかったからである。また、大地を耕す人もまだいなかった。

このように、「畑」と訳されたサーデーですがその本来の意味は、草木一本生えていない、雨も降らない、耕されてもない土地を指すのです。これは畑というよりはむしろ荒地、荒野です。この荒野にとどまる者とはもちろんイスラエルの残りの者です。彼らは先に述べた大勢の群衆に御国の福音を宣べ伝え、天に上らせますが、彼らイスラエルの残りの者は地上に、荒野にとどまります。それが「畑にいる人も戻ってはいけません」と言われたイエシュアのたとえの意味、神のご計画です。

さらにこれを強調してあの滅びの町ソドムに振り返った、つまり戻ろうとして死んだあの「ロトの妻」のよう(創 19:26)であってはならないと言われています。このソドムとロトの妻の関係は、終わりの日のエルサレムとユダヤ人に結びつきます。黙示録の獣、反キリストがエルサレムを奪うその日、イスラエ

ルの残りの者はエルサレムに背を向けて一路荒野のボツラへと逃れ、三年半の間生き延びますが、これについて行かなかったユダヤ人はこの獣によって殺されます。その事実の「型」がソドムとロトの妻の中に表されており、「自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます」という御言葉にもそのような意味が込められていると思われます。このように「屋上にいる人」と「畑にいる人」のたとえば、大患難の中でイエシュアを信じ御座の前に上げられる大勢の群衆と、エルサレムを捨て荒野に逃れ、そことどまるイスラエルの残りの者を表しており、それはまさに次に語られている「一人は取られ、もう一人は残されます」というたとえにも繰り返し強調されて表されているのです。

5. 死体と禿鷹

ルカの福音書【新改訳 2017】

17:34 あなたがたに言いますが、その夜、同じ寝床で人が二人寝ていると、一人は取られ、もう一人は残されます。

17:35 同じところで臼をひいている女が二人いると、一人は取られ、もう一人は残されます。」

17:37 弟子たちが、「主よ、それはどこで起こるのですか」と言うと、イエスは彼らに言われた。「死体のあるところ、そこには禿鷹が集まります。」

「死体のあるところ、そこには禿鷹が集まります」というイエシュアのたとえば、以下の出来事を想起させるものです。

創世記【新改訳 2017】

15:7 主は彼に言われた。「わたしは、この地をあなたの所有としてあなたに与えるために、カルデア人のウルからあなたを導き出した主である。」

15:8 アブラムは言った。「神、主よ。私がそれを所有することが、何によって分かるでしょうか。」

15:9 すると主は彼に言われた。「わたしのところに、三歳の雌牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩のひなを持って来なさい。」

15:10 彼はそれらすべてを持って来て、真っ二つに切り裂き、その半分を互いに向かい合わせにした。ただし、鳥は切り裂かなかった。

15:11 猛禽がそれらの死体の上に降りて来た。アブラムはそれらを追い払った。

15:12 日が沈みかけたころ、深い眠りがアブラムを襲った。そして、見よ、大いなる暗闇の恐怖が彼を襲った。

かつて主はアブラムとこのような形で契約を結ばれました。それは彼とその子孫すなわちイスラエルに「この地を…所有として…与える」という約束においてでした。主は「三歳の雌牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊」を用意させ、アブラムはこれらを「真っ二つに切り裂き」ました。「それらの死体」が聖書で最初に使われた「死体」ベゲル(בְּגֵר)です。ここに禿鷹のような「猛禽が…降りて来た」「そして、見よ、大いなる暗闇の恐怖が彼を襲った」とあります。これもまた世の終わりの大患難を指すものと思われます。ちなみに切り裂かれた三つの家畜は三つの神殿を指し、エルサレムにおいて三度神殿が破壊され、けがさ

れることが表されているのです。今日においてそれは二度まで成就しています。すなわち B.C.586 年にバビロンによって破壊された第一神殿と A.D.70 年にローマによって破壊された第二神殿です。やがて終わりの日には第三神殿が建てられ、これが反キリストの手によって獣の神殿となり、こうして三度エルサレム神殿とイスラエルの民は「引き裂かれる」ことになるのです。これが「大いなる暗闇の恐怖」が指し示す終わりの日の大患難の始まりです。このような時代において「一人は取られ、もう一人は残されず」すなわち御国の福音を信じた大勢の群衆が天に上げられ、額に神の印を受けた 144,000 人のイスラエルはこの地に残される、ということをイエシュアはたとえを用いて語られたのです。そしてこれらの出来事を経た後、イエシュアは地上に再臨され、イエシュアとイスラエルの残りの者はまさにこの「ただし、鳥は切り裂かなかった」という「山鳩と鳩のひな」のように結ばれ、神と人が一つの巣、一つの家、一つの国とともに住まうようになる「神の国」が成就するのです。

このように、イエシュアを信じない、メシアとして認めない者は「神の国」を見ることはない、という前置きがなされた上で「神の国はいつ来るのか」どのようにして来るのかということにイエシュアはたとえを持って答えられました。それは教会の携挙、また反キリストの出現に始まる大患難時代、そしてその中で起こされるイスラエルの残りの者と、その宣教の働きによって救われる諸国の民、大勢の群衆、これらの登場を経た後に、イエシュアは地上再臨され「神の国は、目に見える形で来る」ということが今日の箇所には「神の国の奥義」として表されているのです。